

# 「いじめ問題に対する生徒主体の取組の有効性の考察」の概略

慶應義塾大学 総合政策学部 4年生 志賀浪菜央

---

いじめ防止プログラムを最初に取り入れた神奈川県藤沢市村岡中学校に調査依頼をし、いじめ防止プログラムとスクールバディ活動が、生徒にどんな効果をもたらすのか、何が変わるのか、実態調査をしました。詳細は、卒業論文「2010年度卒業プロジェクト『いじめ問題に対する生徒主体の取組の有効性の考察』」に書いてあるので、そちらをご覧ください。

## (いじめ防止プログラムとスクールバディ活動)

村岡中学校では、いじめ防止プログラムを道徳の時間に行っています。担任の先生も生徒と一緒に受けています。現在、村岡中学校のスクールバディは28人。月・水・金にバディルームを一般開放して生徒の相談を受けています。また、いじめ防止啓発運動をしています。どのような啓発活動をやるかは生徒の発案で決まるので、活動の内容は年々変わっていきんですが、例えば、去年は隣の村岡小学校に、いじめ防止の出前授業を行いました。「いじめとはこういうもので、こういうことをしちゃいけないよ、僕たちはいじめ防止活動をしているスクールバディだよ」ということを、朝礼の時間を使って教えに行くのです。2年前は、いじめ防止の啓発映画を作りました。

こういう話をすると、皆さんの多くは、「スクールバディって、バディルームでいじめの悩みを抱えている生徒を受け入れて、ガツツと解決するんでしょう？」って言うのです。しかし、バディルームに来て相談する件数は、実際には少なく、たぶん、年に2～3件と校長先生がおっしゃいました。「何だよ、そんなだけ？」と思うかもしれませんが、ただそれだけではなく、校長先生やバディ担当の先生は、「スクールバディが存在することに意義がある」とおっしゃるのです。それが何なのかを調査したのが、私の取組です。

## (インタビュー調査)

今年バディになった1年生8人に、いじめ防止プログラムが終わった時と、バディ研修が終わった時にアンケートをとりました。そして3年生にはインタビューを行いました。

今、1年生のAさんとHさんの2人のデータがあります。Aさんは傍観者と被害者と加害者、全部経験しています。いじめ防止プログラムで学んだことは何ですかという質問に、Aさんは「いじめの加害者、被害者、傍観者の気持ちを理解できるようになったと思う。講師の先生が、みんながワークシートに書いた気持ちを読んでもくれたので、他の人がこんなことを考えているのだからということを知ることができた」。次に、変わったことは何ですかという質問に、「加害者にはつらいこともたくさんあって、そのことが原因で、いじめになることもあるんだということを知ることができた」。行動したことはという質問には、「家族、特に母に相談した、母親は的確なアドバイスをしてくれて、いじめられている人に話し掛けるタイミングを持てた」と書いています。

Hさんは傍観者の経験のみです。学んだことは、「いじめは加害者、被害者だけの問題じゃなくて、クラス全体の問題だということ。」変わったことは、「いじめ防止プログラムを受ける前は、いじめを見ても、どうしても見て見ぬ振りをしていただけで、受けた後では、相談に乗ったりしたいと思うようになった」。たぶん少しずつ意識の変化があったのだと思います。行動したことは、「いじめられている人に声を掛けて仲良くすること。それとクラスの強い女子が、『キモイ』とか悪口を言っていたから、『やめなよ』と声を掛けた」と書いています。

次にバディ研修が終わった後に、また同じようにアンケートを取りました。Aさんは、バディ研修で学んだこととして、「私はこんなにも人の悪そうな顔をしているのだからって思った。いらつくこともあるけど、いいこと

もあるから、笑っていようと思う」。変わったことは、「模擬面談の時に、どう接していいか分かんなかったけど、2回目の時は、こういうふうに接すればいいんだと分かった」。最大の焦点なのですけれど、行動することはという質問に対して、「いじめられている人と話したりするようになった。『大丈夫?』とか『私もそういうことあったよ（本当にあったときだけ）』と言ったり、ただ一緒にいられるだけで、心安らぐ人もいだろうから、そんな人には一緒にいてあげる。ずっと一緒にいられない人に対しては、私は味方だよと思ってもらえるようにする」。かなり具体的にアプローチを考えてくれていると思います。

Hさんは、「一人で行動に出るのではなくて、誰かに相談するのも大事だということ学んだ」と書いています。また、変わったことは、「前までは相談を受けても、アドバイスなんてとてもできなかつたけど、研修を受けて少しアドバイスもできるようになった」。行動の変化は、「周りの人たちと相談するようになった。いじめに自分が関係なくても、もっとしっかりと知識を深めて勉強もして、いつ、誰に相談されてもいいようにする。いじめのことを知らない人たちに、ちゃんと伝えられるようにする」と書いています。

このようなアンケートからも、子どもたちがしっかりと考えて、自分なりに行動しようと意識が変化していることが見てとれると思います。

しかし、肝心なのはこの先です。これが3年生になっても続くかどうか調べるために、3年生のスクール・バディの2人にインタビューしました。T君に、「何か変わったことありますか」と聞いたときに、ちょっと考えて、「小学校の時は、いじめを見ても、『はい、はい、はい』みたいな感じで、流していたのです。でも、バディ活動に入って、文化祭でいろんな劇をやったりするのですけれど、そういうのを通して、だんだん考えるようになってきて、『はい、はい』じゃなくて、一個づつしっかりと受け止められるようになってきた」というふうに言っていました。

校長先生がおっしゃるには、バディルームでの相談は、年に2～3件しかないということなのですが、どうやら、クラスとかバディルーム以外で、相談を受けることがあるらしい。「それが即解決に結びつかなくても、心の支えになっているみたいだよ」というお話を聞きました。

それで、「実際どうなの?」って聞いてみると、N君は、夏休み明けに、髪の毛を染めて、服装の乱れとか、そういう風になっちゃった友達のM君に対して、「周りの子は、怖がって話し掛けなくなってしまったけれど、人は外見じゃなくて中身でしょ。おれは昔からその子と友達だったし、そいつのことはイイ奴だと知っているの、怖がらずに話し掛けてずっと友達でいようと思っています」というようなことを言っていました。

N君は、「僕はスフィンクスになりたい」と言うのです。その子が言うには、今の教室は三角形の権力構造ができています。彼は、力関係のピラミッドと言ったのです。要するにトップにいる子が、すごく偉くてクラスの意見を左右して、中間が従うみたいな構造ができていのだそうです。私は今23歳ですが、私の頃も若干そんなことがあったような気がします。先生方に聞くと、昔はそんなことはなかったと言っていました。

ただ、N君が言うには、「上の人」たちは悪くないのだそうです。その子たちにはオーラがあるから自然にみんなが従う。また、「下の人」も悪くないと。どうしようもなく従ってしまう、そういう子もいるのだそうです。悪いのは中間の子たち。中間にいる人が「上」に媚びたり、「下」を見下したりしなければいいんだと。彼は、「絶対に僕はこの中間層には入らない。スフィンクスでいたい」と。そういう心構えでいたいと言っていました。

しかし、全部のスクールバディがいじめをしないかという、実際そんなことはないのです。やっぱり中学校時代って、いろんなことがあるじゃないですか。私もたぶんそうでした。スクールバディの中にも、いろんなことがあって、いじめに荷担してしまう子どももいる。でも、先生が、「おまえスクールバディだろう!」って言った瞬間に、「あっ、そうだった」となるそうです。逆に、「私はバディだから絶対にいじめはやらない」という子もいるみたいです。ですから、いじめ防止プログラムやスクールバディ活動が、子どもたちの心の中に、小さな変化を生みだしたり、「僕はいじめをしない」という歯止めになっていることは確かだと思います。

## (スクールバディの課題)

村岡中学校が今抱えている課題と、その取組についてお話します。いじめ防止プログラムやスクールバディ活動によって、確実に、子どもたちへの影響はあると思うのですが、では、活動の成果を数字に見せてくれと言われても、なかなか数字には表れにくいものです。バディルームに何人相談に来て、いじめが何件解決したかと問われても…。その件数が少ないからと言って成果がないといえる問題ではないじゃないですか。

しかし、中には、「いじめ防止プログラムやスクールバディがあるのは知っているけれど、実際何をやっているの?」「ほんとにやる意味があるの?」という疑問の声があるのも確かです。ですから、私が今回やった研究のように目に見える形にしていくのも一つの手だと思いました。

元校長先生が、「こういう活動というのは、やったことに対して反応がないと、生徒自身のモチベーションが下がってしまうし、周りの理解につながらない。生徒会にしる、何にしる、もうちょっと公式な場で、コンスタントに発表の場を作らなければ、ちょっとずつ停滞していってしまう」とおっしゃっていました。そういうことが実際起きていると思います。始めた頃は、生徒会とかなり連携があったのです。すると、朝礼の時も生徒会の枠があって、そこで「今週、スクールバディは何々やりました」とか、「こういう地域で発表してきました」みたいなことを言う場がある。生徒たちの中では、「あっ、スクール・バディってこういうことをしているんだ」とか、職員にもそういう実感がわきますし…。

今、村岡中学校では、生徒会通信の一角に、バディ活動の広報みたいなものを作ってもらっている。生徒自身がポスターとか発表の場を自分たちで作っていて、なんとか活動を広げたいと言っていました。子どもたちには意識があるので、なんとかバディ活動を広報するシステムを作っていくのも必要なことだと思います。

スクールバディ活動って、藤沢市でもいくつかやられているのですけれども、先生同士、生徒同士で、もうちょっと活動をシェアできる場があればいいのではないかなと思いました。情報交換をすると、お互いの活動のヒントになる。いじめ防止活動って、ポスター作り映画作り、いろいろやることはあるのだろうけれど、どうしても一校ではアイデアが固まってしまう、他のところとアイデアのシェアができれば、もっと広がりがあるのではないかと。実際、村岡と湘洋という中学校が独自で交流をしたことはあります。ちゃんと先生が引率してバディが相互の学校を訪問して、バディ活動を紹介しあったこともある。でも、なかなか続かない。年に一回「スクール・バディ・サミット」があるのですが、年一回なので、もうちょっと交流の場があればいいなと思った次第です。